



恋のイーシャンテン



ぽてとぱい

おかしなことになった。

大学前の雀荘で卓を囲みながら、新庄上(しんじょう のぼる)はそう思った。
今日はいつものフリーではなく、セットと言われる貸卓で来ていた。

雀荘の営業の種類は、フリーとセットの二種類がある。

フリー打ちというのは、バラバラに来た客同士で、三人や四人の卓を作る。
人数が足りなければ店員が入って打つ。

見知らぬ相手とやるので、それなりにマナーやルールに明るくないと敷居が高い。
また、店によってレートも違うが、ようはお金を賭けて打つので、どこことなく真剣な、
ギャンブルにつきものの殺伐とした空気がある。

それに対してセットは、仲間内で人数が揃っているときに、麻雀卓を時間単位で借りるのである。

学生街にはセットを低料金で提供している店も多くあり、
店によってはビリヤードやカラオケに行くよりも安あがりな場合もある。
当然、気心の知れた者どうしワイワイと気軽に遊ぶのがセットの魅力である、はずなの
だが・・・。

今、上の前で物珍しそうに全自動卓を眺めているのは、つい二時間ほど前に知り合ったばかりの
、
しかも女子だった。

女子と麻雀卓を囲む、ただそれだけのことで、慣れ親しんだはずの雀荘が、別世界のような
。

事の発端は、四月一週目の専門演習の授業、早い話がゼミの顔合わせだった。

上(のぼる)が選んだゼミは、上の他に学生はたったの三人。

一回生からの付き合いで麻雀仲間でもある相川。

何回か授業で見かけたことのある女子の河原町子(かわはら まちこ)。

あとは柴島(くにじま)という学生がいるはずだが、今日は欠席していた。

初回ということもあり、簡単な授業のガイダンスと自己紹介、そして各回持ち回りで受け持つ発表の順番を決めてお開きになった。

一方的に教授が終了を告げ出て行った後も、三人はなんとなく教室に残っていた。

相川が上に話しかける。

「なあ上、この後どうする？」

どうすると言われても特に予定もない。

今日の授業はこのゼミで終わりだし、今日はバイトも入ってない。

どこにでも行けるし、どこに行かなくてもいい。

「だったら、久しぶりに行かねえ？」

そう言いながら相川は、右手で牌をツモる仕草をしてみせた。

「なにに、どこ行くの？」

意外なことにこれに興味を示したのは河原さんだった。

「雀荘だけど。河原さん麻雀とかするの？」

「家族で何回かしたことあるから、ルールはわかるよ。」

この辺に雀荘とかあるの？」

「駅前には結構あるよ。学生街だから値段も安いしね。行ってみる？」

「行く行く～。怖い人とかいないよね？」

「いねえいねえ。いかついオッサンはいるけど。あと女の子の店員さんもいるよ。」

上が口をはさむ余裕もなく、二人の間でトントン拍子に話が進んでしまっていた。

「じゃあ行こうぜ、上。河原さんいるし、セットでいいだろ？三人打ちで。」

「うん・・・。」

曖昧に返事をしたものの、上は落ち着かなかった。

おそらく相川が向かおうとしているのは、一緒によく行っている駅前の雀荘「ハチ」だろう。

しかし、いつもなら大学の授業に飽きた息抜きに向かうその店に、

ゼミで知り合った、しかも女子と行くというのは違和感があった。

それはなんというか、遊びの場でも真面目でいることを強いられるような、

妙な緊張感だった。

「三人打ちって萬子抜くんだっけ？」

「そうそう。あとはだいたい四人打ちと一緒にだよ。」

そんなことを言いながら二人はもう鞆を担ぎ教室を出ようとしている。
上は慌てて二人の後を追った。

しかし、意気投合するのが早い二人である。
上はふと、相川に尋ねてみた。

「なあ、お前、河原さんと知り合いだったの？」
「別に。今日初めてだよ。」

そうだった。こいつはそういう奴だった。
初めての相手でも、例え年齢や性別が違ってても、
人見知りせずに付き合う男、それが相川だ。
一年のときも、入学したてで、みんなぎごちなく友達作りに手を出すなか、
相川は昔からの友人のように、上に声をかけてきた。
さもそうすることが当たり前であるかのように。

そういえば、相川の下の名前は何かだったかな？
普段「相川」としか呼ばないので、ついうっかり忘れてしまっていた。
歩きながらゴソゴソと右手をポケットに這わせ、携帯の電話帳を確認してみたが、
そこにもただ「相川」とだけ登録してあった。
確かタカシかタケシだったような気がするが。

結局、相川の名前は思い出せないまま、上たちは雀荘「ハチ」の前に着いた。

大学と駅の間地点、喫茶店の横の狭い階段を上った二階が、ハチの店舗である。夜から朝方にかけて、特に週末や夏休みなどの長期休暇になると、店内は学生の群れや息抜きに麻雀に興じるサラリーマンで賑わうが、平日の夕方では、客はまだ誰もいなかった。

相川が先頭に立ちドアを開けると、上や相川にとってもう馴染みになっている店長が、大きいがやる気のなさそうな声で「いらっしゃい」と言った。色落ちとくたびれた襟元が何年も着ていることを裏付けているポロシャツ、七分丈のカーゴパンツ、クロックスのサンダルにベースボールキャップという、いつも通り20代後半という年齢にしては落ち着きのないファッションで、店長はタバコを吸いながらスポーツ新聞を読んでいた。ふとその視線が、上の影に隠れるようにしながら、好奇の目を店内に向けている河原を捉えた。

「おいおい、今日はまたえらいべっぴんさん連れてきたなあ。で、どっちの彼女なん？」